

# 知名度を辞書に求めて — F. Mistral の場合 —

桜井博章

最近、黒いビニールのショッピング・バッグを気軽に提げている若い女性を街でよく見かける。何気なくその袋の上部にプリントされた金文字を拾い読みすると、MISTRALとあり、その下に2行にわたってやや小さく、COLD NORTHWEST WIND BLOWING OVER THE COAST OF MEDITERRANEAN IN FRANCE と書いてある。大部分の所有者は、書体の大きい文字だけを読んで、「ミストラル」袋ぐらいの知覚で、それが「地中海沿岸に吹く北西風」の名称か、「パリ・マルセイユ間を走った列車」(1981年9月、超高速列車T.G.V. <Train à Grande Vitesse>の登場でミストラル号廃止)の名か、それとも「南仏詩人」のことか、その意義を確認することもなく持ち歩いているのに違いない。日本における「ミストラル」の平均的な知名度は、案外このようなところにあるかもしれない。

従って、本題の南仏詩人「フレデリック・ミストラル」の知名度となると、当然、有識者の一部に限定されてくる。即ち、西洋文学研究者、語学研究者及び一部の外国文学愛好者以外には、あまり馴染みのない固有名詞ではないかと思われる。

とは言っても、「ミストラル」について何等かの形式で記述されたものとして、これまで、フランスに関する紀行集、随筆、語学書等があり、加えて代表作『ミレイユ』(岩波文庫『プロヴァンスの少女—ミレイユ—』杉富士雄氏訳。主婦の友社版もある)も刊行されているので、その知名度は前記の枠以上に拡大できるかも知れない。しかし、本論では一応知名度零から出発し、内外の辞(事)典から、「ミストラル」の軌跡を求めてみることにしたい。

## I 国内の辞(事)典

### 1. 語学辞典

先ず、『仏和大辞典』(白水社、1981、初版)でみると、「mistralien, -enne」という見出し語で、「〔Mistral, 1830~1914、近代プロヴァンス語の詩人〕ミストラルの」とある。そして、『スタンダード仏和辞典』(大修館、1975、増改訂版)でも、同じく形容詞の見出し語で、前記の「プロヴァンス語」が「南方フランス語」となっているほかは、同様な記述がなされているだけである。その他の仏和辞典ではいずれも取り挙げていない。従って、仏和辞典関係では、生没年、職業しか判明できない。

次に、『新英和大辞典』(研究社、1965、第四版)を読むと、「Mistral」の項で、「Frédéric ... プロヴァンス文学復興の指導者。Nobel 文学賞(1904)……」とあり、同辞典第五版(1981)になると「cf. Félibrige」と追記される。

その他の英和辞典を初め、伊和、西和、独和辞典でもその紹介は索められない。

以上のように、語学辞典では、編集方針、収録語彙等の制約によって取り挙げ方の相異があるものの、『新英和大辞典』が最も詳細な記述を与えているとは全く皮肉なことである。それにしても『仏和大辞典』及び『スタンダード仏和辞典』では、「stendhalien」、「shakespearien」等の人名関連語も均一に採用されているが、その他の仏和辞典では、「shakespearien」はあっても、フランスの著名な作家の関連語がない場合が多く、なにか腑におちない気がする。

## 2. 国語辞典

百科事典的要素が加味されるため、国語大辞典になると記述がより詳細になる。『広辞苑』（岩波書店、1976、第二版補訂版）では、

「……叙事詩『ミレイユ』など多くの詩作のほか、近代プロヴァンス語辞典『フェリブリージュの宝』がある……」

と前記 I の 1 で紹介した事項に代表作を加えている。

また、『日本国語大辞典』（小学館、1975）でも、

「……プロヴァンス地方の言語・文学の再興を目ざす運動を行い、また、民間伝説に取材した牧歌的な詩を書いた……」

と記述し、「フェリブリージュ」運動にも触れ、『広辞苑』より若干詳しい解説を与えている。なお、同じ小学館の『国語大辞典』（1981、初版）になると、前記と同一の記述内容が記されているが、なぜかノーベル賞の事項が欠けている。

このように、この種の辞典になると、生没年、代表作及びその傾向、業績まで紹介し、『Petit Larousse』的な取り挙げ方で、即ち、最小限の情報で、効果的なその役割を果たしている。

## 3. 人名辞典

『世界人名辞典・西洋篇』（東京堂、1970）になって初めて、生没年月日、『ミレイユ』の仏題名及び刊行年が現れる。また、詩人のフル・ネームも紹介しており、これは『フランス文学辞典』（全国書房）と本辞典のみが記述している事項である。

「Mistral, Joseph Etienne Frédéric (1830 9/8～1914 3/25)…… Mireille (1859)…」のように記されているほかは、国語辞典とほぼ同様な記載内容となっている。

増補版を 81 年末に刊行した『岩波西洋人名辞典』になると急激に視野が広まってくる。

「……プロヴァンス地方のマイヤーヌ Maillane 生れ、ルーマニユ、オーバネル等と共にプロヴァンス語（中世吟遊詩人の用いた同地方の古語）、及びプロヴァンス文学の維持、純化を主張するくフェリブリージュ Félibrige > 運動を復興した」

次いで主要作品 7 点を原題（プロヴァンス語）と刊行年を付し、ジャンル別に列挙している。

「……田園的叙事詩『ミレイユ、Miréio, 1859』、プロヴァンス英雄賛歌『Calendau, 1867』、中世伝説に取材した『Nerto, 1884』、ローヌ河を歌った『Lou Pouèmo dou Rose, 1897』、劇詩『La rèino Jano, 1890』、抒情詩『Lis Isclo d'or, 1875』等がある。また、言語学的な著作に『Trésor du félibrige, 2 巻, 1878～86』がある」

と紹介している。そして終節に至って、

「……当時の中央集権主義に反対し、社会的にも芸術的にも連邦主義を奉じた……」と結んでいる（その他の作品 3 点及び参考文献 1 点を末段で紹介）。

旧版(1956)と同一の記載内容であったが、出生地、言語復興運動、主著解説、そして政治姿勢まで記述されると、ミストラルの全容がかなり明白になってくる。『Collier's Encyclopedia』及び『Everyman's Encyclopedia』のような英米における大衆的な百科事典と同様に簡明な記述で極めて親しみ易い感じを受けるが、作品名の和訳がない(『ミレイユ』以外)ことが残念である。

その他、『大人名事典・外国篇』(平凡社、1962)でも取り挙げているが、内容的には国語辞典程度の記述に終わっている。しかし、

「……代表作『ミレイユ』はオペラ・コミックとして上演された」

と特記しているのが印象的である。

#### 4. 百科事典

『世界大百科事典』(平凡社、1967)は、

「メラヌ(マイヤヌの誤記)に生れ……プロヴァンスの民族意識の高揚に努力……雑誌『プロヴァンスの人々』(『プロヴァンスの乙女』のこと)に数篇の詩をよせ……1854年にはルーマニユ、オーバネル等7人の詩人と詩文会〈フェリブリージュ〉を結成し……1859年、彼は傑作『ミレイユ』を刊行……ラマルティエヌの絶賛を博し、さらにグノーによってオペラとして紹介され、ミストラルの名声を一躍高めた……」

と始まり、前項3で述べた政治姿勢を解説して、主要作品の紹介に入っている。即ち、既述(原題)の『カラダル』、『ネルト』、『ローヌ河の詩』、『ジャーノ女王』、『黄金の島々』、『フェリブリージュ宝典』に加え、叙事詩『オリヴの収穫』(1912)及び自伝『思い出の記』(1906)を紹介している。

次に、『大日本百科事典ジャポニカ』(小学館、1971)で調べると、内容的には国語辞典程度の記述で、百科事典としてはやや物足りない感じがするが、文末に、ミストラル晩年の偉業である「アルル博物館」の設立を記している。これは海外の著名な百科事典ではほとんど紹介されている重要な事項であるが、なぜか国内では、他に『フランス文学辞典』(白水社)でしか取り上げていない。

なお、『玉川百科大辞典』(1960)でも記されているが、詩人の紹介は、語学辞典程度の内容で終わっている。

以上みてきたように、『世界大百科事典』クラスになると、英、仏、伊の百科事典と同じように多くの情報を提供し、全体像も判然と把握できてくる。欲を言えば、作品名の原題及び参考文献が付されていれればと思う。

#### 5. 文学辞典

一般的な文学辞典として多くの人々が利用している『新潮世界文学小辞典』(1966)は、「フェリブリージュ」、『ミレイユ』、政治姿勢、作品紹介、そしてノーベル賞で結ぶという具合に、簡潔ですっきりとした構成で記述されている。

「……全篇12の歌からなる牧歌的な悲恋の物語『ミレイユ』は……西欧文学においてその正当な地位を要求しうる一大文学運動に発展せしめる原動力となった」

と、『ミレイユ』の占める位置の偉大さが明記されている。

専門辞典に入って、まず、『フランス文学辞典』(全国書房、1950)でみると、

「……富裕な地主の息子、アヴィニオンに古典を学び、その師ルーマニユと相知り、その影響を受

けた。Aix エクス大学に法学士の称号をえ、のち故郷にしりぞき……」

と、生い立ちに続いて「フェリブリージュ」及び『ミレイユ』に言及している。そして、

「詩人として彼は、ホメーロス学派の末裔と自称し（『ミレイユ』の冒頭に出る）、古代ローマ詩人を思わせる民族意識の濃厚な叙事詩を書いたが、牧歌的傾向の豊富である点よりロマン主義の影響を窺わせる……」

次いで、言語復興、社会活動に対する意欲的な姿勢を説いている。

「……農民の俗語と墮したプロヴァンス語にマレルブの刷新を加え、独特の作詩法を確立……連邦主義を奉じ、血と自然のつながりのもとに個性を発展させ、国民相互の協力によって団結するとき国家は完全なる進歩をとげる」

と、南仏詩人の情熱的な政治姿勢を紹介している。そして、最後は主要作品の紹介に入る。

これまで専門辞典的な味わいをみせた説明が展開されたが、ここで手痛いミスが出現したのは残念である。先ず、『カランダル』（1867）を『カレンダル』（1966）としたのは見逃すとしても、次に、「アルル博物館」を『アルル風俗集』と作品名としたこと、そして、自伝『思い出の記』を2分冊短篇集として紹介していることである。文学辞典としてもやや考えさせられる問題でもある。なお、この他の部分でも、『ミレイユ』のオペラ化の説明で、作曲者グノーの記載がなく、脚色ミシェル・カレを登場させているのも、片手落ちの感じがする。

辞書紹介の最後に、有終の美を飾る意味で、『フランス文学辞典』（白水社、1974）における「Mistral」の項を繙いてみよう。

「……1851年、エックス・アン・プロヴァンスの法科大学を卒業……1854年5月21日、他の6人の詩人とフォン・セギーニュFont-Ségugneの館に会し、フェリブリージュを結成……1859年、機関誌『アルマナ・プルーフエンサウ』Armana Prouvençauの発行に参画」

学業終了後、『ミレイユ』刊行（59）までの動向を前段に記す。

「……アヴィニオン出版の田園叙事詩『ミレイユ』……この詩の刊行でとられたフランス語の対訳の方法は、その後の作品でも行われた……」

1859年2月21日、師友ルーマニーユ経営の書店から『ミレイユ』を出版し、パリの中央文壇で絶賛を受ける。これも仏語対訳を試みた作者の意図が成果を収めた一因ともなっている。以後、ミストラルは自ら仏語訳を付して作品を発表している。

「……その後の作品の叙事詩では、山岳及び海岸地方を舞台に中世プロヴァンスの栄えを歌った『カレンダウ』（カランダルのプロヴァンス語読み）Calendau（1967）」

と、中段では、前項3の『岩波西洋人名辞典』で紹介したように、ジャンル別に主要作品（6点）を列記している。

次いで、地方分権主義に走ったミストラルのカタロニア詩人との交流（1861～70）、「フェリブリージュ」運動強化のための改組（1876）を説き、後段に入って、晩年の偉大な業績として、プロヴァンス民俗博物館ともいうべき「アルル博物館」Museon Arlaten（設立1899年。その後、ノーベル賞金で拡充）、及びプロヴァンス語をロマンス諸語と対比させながら、その出典なども解説した『フェリブリージュ宝典』を成し遂げたと記述している。そして、最後に『思い出の記』Moun Espeli Memòri e Raconte（1906）とプロヴァンス語版旧約聖書『創世紀』Genèsi（1906）を紹介して結んでいる（参考文献6点）。

このように、約1400字を費して、ミストラルに関する必要にして充分な事項が網羅され、しかも、「フェリブリージュ」及び『ミレイユ』については、別個に見出し語を設けている。

#### まとめ

国内の辞(事)典でミストラルの知名度を索めているうちに、なにかジグソー・パズルのようなミストラル像となってしまったことを先ず、ここでお詫びしなければならない。

ともかく、以上みてきたように、日本でほとんど無名の詩人であっても、語学辞典で30~40字以上、国語辞典で80~100字以上、人名辞典及び文学辞典になると250~400字、百科辞典700字以上、そしてフランス文学辞典では1000~1400字も費してFrédéric Mistralの軌跡を描いている。

そして、FrédéricのFは、Félibrigeへ、MistralのMは、Mireilleへ通じるように、関連項目を拡げて辞書を繙けば、より明確な全容が限りなく展開される。

## II 海外の辞(事)典

### 1. 『広辞苑』的な辞書

『Webster's New World Dictionary of American Language』(1959)では、

「Provençal poet; received Nobel prize in literature, 1904」

とあって、『新英和大辞典』と同じような取り挙げ方である。ミストラルの知名度を『広辞苑』クラスの辞書に索めるとなると、やはり、『Petit Larousse』の登場を仰がねばならない。その1964年版には、

「... né à Maillane (Bouches du Rhône)..... auteur de 『Mireille』, poème rustique, de 『Calendal』, des 『Ils d'or』 etc. Fondateur du félibrige. Il en reste le plus illustre représentant ...」

とあり、これを82年版でみると、前記の作品に出版年が入り、Echegarayとともに1904年にノーベル賞と追記されている。

優れたプロヴァンス語研究者を有し、ミストラルの主要作品を多く紹介している西独では、その刊行する辞書になると、なぜかミストラルの知名度は索め難い。『Brockhaus Enzyklopädie』(1971)で、やっと『広辞苑』的なものが得られるという次第である。

「……プロヴァンス語再興運動を先導し、プロヴァンス語で辞典、詩集、物語を書いた」と結んでおり、出生地、生没年月日、ノーベル賞の記述はあるものの、作品名の紹介はなく、全12巻の百科事典としてはいささか物足りない感じがする。『Meyers Enzyklopädisches Lexikon』(1981)の百科事典でも同じく簡潔な説明にとどめているが、

「……『ミレイユ』に対して、アカデミー・フランセーズから賞(1861)が与えられた」とあり、これは海外の辞(事)典では、他にない紹介事項ではないかと思う。

その他、P. Robert『Dictionnaire alphabétique et analogique de la Langue Française』(1973)を初め、『Dizionario della Lingua e della Civiltà italiana contemporanea』(Palumbo, 1975)においても、そして『Grand Larousse encyclopédique』、『Oxford English Dictionary』でさえも「Mistral」の見出し語はなく、「Félibrige」、「Provençal」等の項で、辛うじてその知名度が保たれているに過ぎない。

## 2. 『岩波西洋人名辞典』的な辞書

前記 I の 3 で挙げた『Collier's Encyclopedia』(1955)では、出生地、「フェリブリージュ」、ノーベル賞の紹介に続いて、『ミレイユ』の事項に触れ、以下のようにその評価も高い。

「His masterpiece, which has been translated into several modern languages, is the famous epic『Miréio』, one of the great poetic creations of the nineteenth century..... Its long digressions are a rich source of folk customs and legends, and its descriptive passages rank among the most colorful in any modern literature」

次いで、簡単な解説を与えた主要作品(7点)を列記し、最後に、詩人の作品には、郷土に対する「異常な愛着心」が至るところに窺えると結んでいる。

また、人名辞典クラスのものとして、『Everyman's Encyclopaedia』(1967)があるが、改めて紹介すべき事項は特になく(参考文献3点)。

## 3. 『新潮世界文学小辞典』的文学辞典

Gabriel Jourdain et Yves-Alain Favre『Dictionnaire des Auteurs de Langue Française』(Garnier, 1980)によると、冒頭で、プロヴァンス地方の意識の高揚とその言語の擁護に努めた業績に対して賛辞を与え、次いで、「フェリブリージュ」運動を通してその言語と文化の再興を図ったと記述している。そして民間伝承を採り入れ、8年の長年月を費した労作『ミレイユ』について次のように記している。

「…… il compose『Miréio』(1851～58, publiée 1859), une épopée faisant revivre les traditions populaires qui, adaptée en 1864, sur une musique de Gounod, en opéra comique: Mireille, immortalisera son nom.」

続いて1867年以降の主要作品(8点)を紹介した後、前記 I の5でも記したようにラテン諸国間の親睦を図った論集、『カタロニア詩人に捧げるオード』Ode aux poètes catalans 及び『ラテン民族に捧げるオード』Ode à la race latine を1879年に刊行したと記している。

そして、同じくフランス文学辞典、Jean Malignon『Dictionnaire des Écrivains Français』(Seuil, 1971)でみると、その記載内容は『広辞苑』的であるが、

「外国語で表現したフランスの作家 ……そしてアルピ十字軍によって南仏諸侯領が崩壊された13世紀から、7世紀間も消失されていたトルバドゥールの言語を用いて作品を発表した Français Mistral に1906年(1904年の誤記)にノーベル文学賞が与えられるとは……」と風刺しているのが印象的である。

## 4. 『世界大百科事典』、『フランス文学辞典』的事典

内外諸辞(事)典のうちで、『New Encyclopaedia Britannica』(1963)が最も多くの紙面を借りて「ミストラル」を紹介している。特に、主要作品についての解説が詳しい。『ミレイユ』についてその例を挙げてみよう。

「... the old story of a rich girl and her poor lover, kept apart by the girl's parents; Miréio, in despair, wanders along a tract of country to the church of the Trois-Maries, in the hope that the latter may aid her. But the effort was too great: she sinks exhausted and dies in the presence of her stricken parents and her frenzied lover.」

ミレイユ終焉の地、Trois Marie (Les Saintes Maries de la Mer のこと。地中海に面したカマルグ島にあって、3人の聖女マリーがこの礼拝堂に祭られている)まで記してその荒筋を説明し、プロヴァン

スの風景、生活、習慣、人物そして伝説を巧みに織り込んだ作品であると絶賛している。

また、冒頭における生い立ちに係わる事項も詳しく、ここで、『ミレイユ』の前身となった田園詩『刈り入れする人々』Li Meissoun (1848、刊行1927)を紹介している。そして最後に、生誕100周年(1930)を祝って、盛大な記念行事が催され、ミストラルに関する数多くの著作物が出版されたと結んでいる(参考文献10点)。

なお、「フェリブリージュ」については、設立年のみの記述にとどまり、詳細は「プロヴァンス文学」の項に記述されている。

『ブリタニカ』1982年版では全面改訂され、これまでの年次を追った記述に代えて、前半部で、生い立ち、「フェリブリージュ」運動を語り、後半部に入って、主要作品(8点)を列記し、『ミレイユ』及び『ローヌ河の詩』については、改めて解説を加えるという形式をとっている。

先ず、冒頭でプロヴァンス語による詩作活動を決定づけた一要因となった師友ルーマニユとの出会いを記述している。

「..... His father gave him a good schooling at the Collège Royal of Avignon (later renamed the Lycée Frédéric Mistral), where he had as a teacher Joseph Roumanille, who had begun writing poems in the Provençal vernacular and who became his lifelong friend. 」

生い立ちの項で、中、高等学校、そして大学へと進学する経緯を紹介しているものは、数点の事典(『ブリタニカ』旧版等)にみられるが、ルーマニユとの出会いを記述したものは、この他、後述の事典(2点)しかない。

前半部は続いて「フェリブリージュ」運動に生涯を賭け、20年(実際には作成を意図してから完成まで18年)の労作『フェリブリージュ宝典』の上梓及び「アルル博物館」創設の大偉業を成し遂げたこと記している。

後半に移って、『ミレイユ』に触れ、旧版同様の解説を与え、グノーによるオペラ化(1863年初演としているが、これは64年の誤記。なお、ノーベル受賞年の誤記もある)を説き、次いで、ローヌ河を運航する荷船の船頭にまつわるエピソード、伝説を描いた叙事詩『ローヌ河の詩』(完成に7年を費す)を特記して結んでいる。

特に、新版は作品紹介の面で、上記のように、詳述したものと、単に列記にとどめたものとの差があり過ぎるところに、なにか違和感を抱かせる。この面も加え、総体的にみて、旧版は、「ミストラル研究ガイド・ブック」的で、将に、百科事典の使命を十分に果していると考えられる。

次に『Grand Larousse Encyclopédique』(1963)によって調べると、冒頭は新版『ブリタニカ』と同様に、ルーマニユの出会いから始まる。

Au cours de ses études au collège d'Avignon, il fait la connaissance de Joseph Roumanille, jeune répétiteur avec lequel il partage bientôt une véritable passion pour les vieilles traditions et la langue provençales .... 」

ミストラルの生涯を決定づけたこの出来事を重視した記述を取り挙げ、次いで、年次を追って全容が展開される。即ち、

1851年、ルーマニユ主宰の同人雑誌『プロヴァンスの乙女』Les Provençales (Li Prouvençalo, 1852年刊行)の出版企画に協力。それが起因にもなって『ミレイユ』の制作を思い立たせる。

1854年、「フェリブリージュ」設立の年。その機関誌『プロヴァンス年鑑』 *Almanach Provençal (Armana Prouvençan)* 刊行の55年。革命でスペインを追われたカタロニア出身の詩人たちと「フェリブリージュ」統合を絶賛した『乾盃の歌』 *Chant de la coupe (Coupo santo)* を絶唱した68年、「フェリブリージュ」強化のため、改組を実施した76年、シャルル・モーラス (Charles Maurras 1868~1952) 等の若手連邦主義者と共に政治活動に燃えた92年。とミストラルの目覚ましい躍動の年々を特記し、この間における詩作品等も合わせて紹介している。

なお、『ミレイユ』、『カランダル』、『黄金の島々』の3作及び「フェリブリージュ」については、別個に見出し語を設けて解説している。

ミストラル生存中に刊行された『Grand Dictionnaire Universel du XIXe Siècle (Larousse, 1872, 複製版 Slatkine 1982)』でも、ルーマニーユとの係わりを重視して、

「 .... Ses impressions d'enfance, ses goûts personnels et sa liaison avec Roumanille le décidèrent à coopérer avec lui à la résurrection de la poésie provençale .... 」

のように記述している。

特に、前記の『プロヴァンスの乙女』については、全記述の3分の1のスペースを借りて、同誌に発表した小品の紹介を含めて、その発刊に対する意欲的な姿勢を描いている。

冒頭では、南仏の詩的方言を復興させた輝かしい業績は周知の事実であると付言し、最後に、エミール・デシャン (Emile Deschamps 1791~1871) の『カランダル』絶賛の詩をもって結んでいるのが、なにか深い感銘を抱かせる。

On disait que Mireille, en ce vaste univers,  
N'avait point de rivale au grand tournoi des vers;

Calendau paraît, et Mireille

N'est plus la splendeur sans pareille.

なお、この事典でも「フェリブリージュ」は別項で解説している。

最後に『Enciclopedia Europea』 (Garzanti, 1978) を繙くこととする。

「 Visse sempre a Maillane, salvo gli anni di studio trascorsi ad Avignone e a Aix. 」

学生時代を除いて、生涯を出生地で送ったと述べているように、冒頭で、ミストラルのプロヴァンス地方に対する強い愛郷心を訴えている。

Nel 1854 fondò con J. Roumanille e Th. Aubanel il felibrismo, dedicando quindi la sua esistenza alla rinascita della lingua e della letteratura d'oc. Il suo impegno in difesa della causa provençale andò di pari passo con la sua attività poetica .... 」

このように、ルーマニーユ、オーバネル (そして、マチュー、ブリュネ、ダヴァン、ジェラ) と「フェリブリージュ」を設立し、オック語及びその文学の復興に生涯を賭け、詩作活動とともにその言語の擁護に励進した詩人の全容を前段で説いている。

後段に入って、先ず、オック語で書かれた最初の長篇詩『刈入れする人々』 (約1000行、一方、『ミレイユ』は約6300行) を取り挙げ、これが中央集権化によって消失された地方の文化遺産の再生を促したと特記している。そして、簡明な解説を付して主要詩篇 (7点) を紹介する。次いで、「フェリブリージュ」を賛歌した論集『講演と論文』 *Discours e Dich* (1906)、自伝『思い出の記』を紹介して、*ottimo prosatore* と賛辞を与え、プロヴァンス語辞典『フェリブリージュ宝典』の刊行を挙げ



て、paziente lessicografo と称え、そして民俗資料館「アルル博物館」設立に対して、etnografo と絶賛している。

むすび

「ミストラル」、「Mistral」及び「mistralien」の見出し語を求めて、内外の辞（事）典でその知名度を披露してみたが、既述したように、「フェリブリージュ」については、別個に見出し語を設けて詳述している辞書もあり、ミストラル像の克明な描写を追求するとなると、「Félibrige」及びその関連語「félibre」並びに「provençal」まで項目を加えなければならない。また、作品に関連させて項目を増加させると、辞書だけで索められる資料は、極めて膨大になる。

今回は、これまで求めてきた断片的なミストラル像を整理復原するに代え、ドーデーの短篇『詩人ミストラル』（岩波文庫『風車小屋だより』桜田伍訳より）の一部を引用して本論を結ぶこととしたい。

「去る日曜日、私がマイヤーヌに不意の訪問をした。フェルト帽子を耳まで被り、<sup>ジレ</sup>胴着なしに<sup>ジャケット</sup>長衣を羽織り、腰には赤のカタローニュ織の胴巻をまとっている。眼は輝き、頬骨の辺りに燃える靈感の火を宿し、高邁にしてしかも柔和な微笑を浮べた、あたかもギリシャの牧人の如き優雅な風格、両手をポケットに入れて、大股に歩きつつ、作詩に余念のない……。『やあ、君か』と私の首に飛びついて、ミストラルは叫んだ」

と。南仏詩人は、今もなお、マイヤーヌの村から「ミストラル」に託して、素朴な愛の詩の数々を届けてくれるような気がする。